

自然の話が聞こえる

野生動物学研究室教授 高槻成紀

ある学生がふと言った。

「自然の話が聞こえるようになりたいんです」

いい言葉だなと思った。そのことは心に残っていたのだが、最近、南さんといっしょに本の原稿を書くことになり、そのことを改めて考えてみた。そしてその本の最後に次のような文章を書いたので、それを紹介することにした。この文章の前に「バードソン」を批判的に書いた文章がある。短時間に何種類の鳥を見たかを競う「競技」の背景にある暗記主義や競争感覚は生き物をじっくり観察することと反すると考えるからである。

学生と里山を歩くことがある。春の田圃を見ながら山道を歩くといろいろな植物が生えており、ときどきチョウが飛んでいたりする。学生は田圃にいるオタマジャクシを見つけたら、子供の頃から虫取をしていた学生だとテントウムシなどを見つけて歓声をあげたりする。田圃の向こうにはコナラの雑木林があり、芽吹きだした若葉の緑がきれいだ。私の目にも、学生諸君の目にも同じように里山の景色が見えている。しかし多くの場合、学生は雑談をしながらかなりのスピードで歩く。それはハイキングのスピードである。

私の歩みは学生よりははるかにゆったりしている。周りの動植物を見るのに忙しいからだ。林の入り口でナガバノコウヤボウキを見つけた。といっても去年の秋に花を咲かせて、結実したものあとなので、秋に確認しておかなければなかなかわかりにくい。田圃の畦

にはセイヨウタンポポやアレチマツヨイグサ、ヒメジョオンなどのロゼット葉がある。まだほかの植物は小さな葉を出しているくらいなのに、なぜこれらは大きな葉をのびのびと伸ばしているのだろうか。それは地面に手を当ててみればわかる。ひんやりした気温とはうらはらに意外に暖かいのである。その地温を有効に利用して光合成をおこなうために葉を地面にぴったりとつけているのだ。もちろんこういう植物は多年生または二年生で、地面には無数の一年生の種子がある。あと一ヶ月もすればその種子から芽が出て、ロゼット葉を取り囲むように生えることだろう。冬の越しかたの違いで植物の一生は大いに違う。この畦にもそういうさまざまな一生をもつ植物がうごめいている。

畦にはタチツボスミレやツボスミレなどのスミレ類もある。スミレ類の花が咲き、実をつけると、その種子にはアリが集まる。それは「エライオソーム」といって種子の一部に脂質に富んだものがついていて、アリはこれを巣に運び込むのである。つまりスミレはアリに種子を運んでもらう工夫としてエライオソームをつけている訳である。これはガマズミの赤い実が鳥に種子を運んでもらうためにおいしい果肉を提供しているのと同じ原理である。スミレはおもしろいことに花が終わったあと、地下から別の果実を出す。これは花なしでできたのだから、受粉によるものではない。つまり遺伝子的には親とまったく同じものをもっている。スミレは二通りの種子を

もつ複雑な繁殖のしかたをするのだ。スマレひとつとりあげても、生きるためにさまざまな工夫をしているのがわかる。

スマレのわきにはカタバミがある。カタバミもおもしろい種子散布をする。紡錘形の果実の中にはゾウリのような形をした種子が入っていて、果実に手をふれるとパシッとはじけて種子が遠くに飛ぶ。ちょうどホウセンカのようなのだ。それにカタバミはヤマトシジミという小さなチョウの食草で、夏になるとこういう場所をチラチラと飛んでいる。学生はこうしたことを見逃して進んでいく。

対岸の雑木林はおもにコナラでできている。こちら側の林にはアズマネザサが密生しているが、対岸にはない。これは自然にそうなっているのではなく、人が刈り取るからである。そういう林にはいろいろな草花があり、歩くのが楽しみだ。だがササのあるほうはひどい。丈が3mもあり、まともには進めないほど密生している。ここは「里山」として保全されてはいるのだが、本来の里山ではこうしたことはなかった。雑木林にはつねに人が入り、薪のために木を切ったり、たきつけの低木の枝を刈ったり、肥料のために枯葉やときに青葉を集めた。ササも畑の野菜の支柱にするなどさまざまな目的で刈り取られた。そうした作業は1970年くらいからはおこなわれなくなり、今は荒れているところが多い。私たちが目にしているササの藪は人の管理の違いによるものであり、それは里山をめぐる日本の農業のありかたと密接に関係している。学生はこうしたことも見逃して進んでいく。

あるとき、同じ里山を昆虫に詳しい人ふたりと歩いた。夏のことだった。私は相変わらず植物に目を光らせる。ホタルブクロやミゾソバが咲いている。だが二人の「昆虫おじさ

ん」はどうやら視線が違うようだ。飛び交うトンボを見て「なんとかアカネ」とか言っている。すごい速さで飛んでいるトンボの翅を見て見分けるらしい。植物についても蝶の幼虫の食草として見ているらしく、葉を裏返して幼虫がいるかないかのチェックをしている。対岸の雑木林にちらりとみえた白いものをみて「ああ、ゴマダラがいましたね」という。ゴマダラチョウを識別したのだ。私も蝶についてはある程度知っているつもりなので、「なんでわかるの?」と聞くと、「あの飛び方がね。それとあの高さだとシロチョウ類とは違うから」。私は舌をまいた。

そのとき、私は自分の目が節穴だと思った。私の網膜にも同じように映っていた景色だが、昆虫おじさんには私に見えないものがたくさん見えていたのだ。同じような経験はほかにもある。クモに詳しい人と歩いた森は短い距離が2時間ほどかかってしまった。思えば森林には木があり、草があり、鳥がおり、昆虫がおり、土の中にはミミズやら微生物もたくさんいる。それぞれの専門家が集まって歩いたら10m歩くのにも何時間もかかるかもしれない。ただ、このような「見え方」は先にあげたバードソンと同じものかもしれない。

大切なのは名前がわかるだけにとどまらないことである。それを入り口として、ひとつひとつの生き物の暮らし方を知り、疑問をもち、生息地や人の生活との関係を考えることである。「見える」ということは物理的に網膜に映ることではなく、そういうことなのだ。

「ソロモンの指輪」という本がある。ローレンツ博士が動物の行動の意味を説き明かし、まるで動物の心を読み取っているようだ。書名は旧約聖書からとったもので、ソロモン王の持っている魔法の指輪をはめると動物のこ

とばが理解できたという故事による。ローレンツ博士がいたかったのは、動物の原理が理解できれば、ソロモンの指輪をはめたのと同じようにその意味が読み取れるということであろう。その意味では1, 2章で紹介した大西さんや南さんはシカの心が読めるし、シ

カの行動の意味もわかる。私はシカの心はあまりわからないが、いつでも植物の生き方のことを考えているから、シカがいる場所ではシカと植物のつながりの意味がわかる。そういう努力を続けることで、少しずつ「自然の話が聞こえる」ようになるのだと思う。